

とき、先生と中上さんとの間に相通じるもののがあつたというか。

**幸綱** 中上君の晩年のことだが、「心の花」の何人かと一緒に飲みに行つた先に中上君がいたんだね。

**黒岩** 向こうは漫画雑誌の編集者と一緒にいたんです。

**幸綱** それで中上君と一緒になつて仲良くやつていたところ、急にケンカが始まつた。

**黒岩** 山下雅人さんが突つかかつたりしたものだから。

**幸綱** 前回の話だからもういいよね。そういうことです。俳句文学館での、そのシンボジウムはわりと話題になつたし、ずいぶんたくさん的人が来てくれました。しかし、それは何回か全国各地で開催した「現代短歌シンポジウム」とは別だね。

▽毎年のように超結社の集まりがあつた

**高山** 現代短歌シンポジウムについて調べて來てくれた人、いますか。いつから始まつて、いつまでやつていたかとか。

**大野** 六〇年代は六二年から六七年までに六回、その後七六年から八四年までに七回行われたと『現代短歌大事典』(三省堂、

二〇〇四年)にあります。あと、シンポジウムをやる母体が常にあつて各地でやつたというよりは、各地で流れを引き継ぎながらシンポジウムが全国的にに行われたんじゃないかと思います。

**高山** なるほど。シンポジウムという言葉 자체が一つの時代の言葉のような気がする。

**幸綱** さつき言つたように六〇年代にはじめて全国的な集会が開催された。富士田元彦さんが、最初は「短歌」編集長として、後には雁書館の「雁」編集長として、中心的に動いた。

**黒岩** 六三年に豊島園でやつたシンポジウムでの、先生の「俺の子供が欲しいなんていつたたくせに! 馬鹿野郎!」つて、あれなんか、けつこうさきがけですね。

**加古** このころまた一つのムーブメントといふか、そういうのが来て、七六年にやつて、七七年に京都でやります。盛り上がつたんでしようか。

**高山** その都度、必ず冊子を作つていたんだ。それ、大野さんはお持ちですね。

**大野** 大体、持つております。

みるとすごいと思う。

**黒岩** 七七年のには坪内穂典さんも参加されていますね。

**奥田** 前衛短歌の人たちとは違うんですね、一つ、代が。

**幸綱** 最初の頃は深作光貞さんたちがやつたでしよう。

**幸綱** 六〇年代はそういう時代です。「律」という雑誌があり、「律フェスティバル」という集会があつた。

**奥田** さつきも言いましたが、七六年のメンバーは佐佐木幸綱、清水昶、中上健次、立松和平、福島泰樹、三枝昂之、パネルディスカッショニのテーマが「仮構の浪漫からわれわれの回復へ」となつていてます。

**大野** 「仮構は浪漫だ」というので、現実のわれわれの回復という意味じやないですか。

**黒岩** だから、そこに小説家とかがいる意味があつたんだよね、きっと。

**幸綱** 「私」が日常そのままの「私」じゃないというのが前提になつていてるわけだ。そこからどういうふうに日常に戻つてくるか。あまり向こう側の話、ファイクションば